

末黒野

すぐろの



12月号
(通巻892号)

風道

森清堯

子ら競ふ鉢の朝顔花の数
榎の葉のそよぎかすかや秋思ふと
夕風に声のびやかや法師蟬
秋雷の夜半の一喝ペンを擱き
潮の香の色なき風の浦曲かな
沢風の磨き上げたり式部の実
虫の声促す風の阜かな
好き嫌ひ風にもあるや猫じやらし
とんぼうの触るる水面の光かな
池の面のさゆらぐ顔の秋思かな
おもむろに風道見せて真葛原
気がかりの電話ひた待ち鉦叩

瑞声

秋蘭

黒滝志麻子

(顧問)

弓なりに草の打ち合ひ野分晴
退院の眼に輝やけり初紅葉
秋蘭や月色の風通り過ぐ
文机に雨後のうす日と秋薔薇
錦秋の山を見上げり足の萎え
錠剤のひとつつ赤色秋の蟬
沼の鬱いつさい籠むる葛の花
露草や暁けより空の晴れわたる

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



つくつく法師

岡野里子

万緑に坐すや風音森の音
白雲の湧き立つ峰や梅雨の明
ざんざ降り後の日差や蟬時雨
新涼の灯りを乗せて観覧車
額づけばつくつくぼふし師の墓前
秋澄めり濡れて優しき墓碑の文字
谷間の日暮の雲や葉鶏頭
水澄むや己が影踏む鷺一羽
竜胆や峠へつつく石畳
遅々として稿の進まず鉦叩

草雲雀

菅野日出子

調律の音のきれぎれ鴟日和
抗ふさま残す形や鴟の贅
秋の夜やいつも傍へに電子辞書
雲迅し月の推敲いくそたび
露草のはかなき藍を活けにけり
又一人友逝く知らせちちろ鳴く
秋風や巫女より受くる呆け封じ
秋麗や千木を触れ来る山の風
武蔵野に残る疏水や草雲雀
秋雷の去りて暫しのうまいかな

白陀師忌

田中臥石

白陀師忌一盞に透く青薄
海霧湧きて道往く人の影淡し
右銚子左安房道海霧湧きぬ
文机の硯海に月射しにけり
白陀師忌稲刈終へてゐたりけり
新米の扶持三俵の届きけり
新米と一緒の笑顔娘婿
稲妻のたばしる上総山低し
潮枯のカンナ炎えをり屋敷路
安房上総国の分るる刈田道

パジャマの子

森 清 信 子

湧水の木洩日の綺羅涼新た
やはらかき闇に身を置き虫しぐれ
朝顔や庭へとび出すパジャマの子
さやさやと風に応へて稲の花
爽やかや堀割残る城下町
子に遺す文書き直し秋灯下
流星やわが齢など知れたもの
秋の蝶森の昏きに迷ひ来ぬ
一面の千草木道沈ませて
雲影の走り稲田のさざめけり

鹿 垣

石 黒 興 平

前山の青葉深むる日照雨かな
磯蟹の逃げ込む構へ潮溜り
代々の遺影に視られ昼寝覚
句座帰りの鞆にこもる残暑かな
漁火を残し流星果てにけり
鯛群れてさざれ波立つひとところ
推敲に合点のいかぬ夜長かな
瀬の音に聴き釣人涼新た
鹿垣の二重に囲む山家かな
降つて止み止んでまた降る白露かな

乙 矢 集

配列は音順、月毎の循環



萩の風 長尾タイ

八十路なる五情薄らぎ萩の風
追ひかくる一筋の夢菊枕
秋彼岸肩中の道ゆづり合ひ
秋刀魚焼く猫の擦りよる脰ら脛
懐郷にむせぶ庭下駄月仰ぐ
ばつたんこ闇の深さを刻みをり
望郷や花野の道の尽くるまで

花 木 権 大川暉美

秋 暑 し 今村千年

秋暑し螻蛄の字いつも間違へて
籐寝椅子俳句手帳の寝そべりぬ
秋めくや隠沼渡る風の音
ふる里の言の葉やさし秋彼岸
青瓢風の青さを纏ひをり
潮騒の秋声となる岸辺かな
爽籟やマストの見ゆるレストラン

亭亭と神杉の杜蟬響む
一片の雲なき朝秋澄めり
風受けて風にあづけて花木権
コスモスのふれ合ふ風の広場かな
遙かまで香の立つ波の稲穂かな
虫すだく小庭の闇の深まりぬ
釣舟の舳先へ釣瓶落しかな

秋惜しむ

太田良一

若者の単線の旅鳥渡る
城跡に打つて出るなり赤とんぼ
濁音を回す水車や秋惜しむ
色変へぬ松を四方の城址かな
行く秋や枕に遠野物語
裏山の小川に拾ふ秋思かな
城壁にすぎるものなし秋の蝶

雁来紅

岡田史女

海見ゆる丘や紅さす酔芙蓉
しがらみを断つ術もなし稲光
湯上りの火照りしづめむ虫の声
父祖の墓のみの故郷雁来紅
蓮の実の飛んで一村しづまりぬ
千屈菜や木橋をめぐる水の音
青瓢箪ぶら下がること競ひけり

秋の蝶

齊藤マキ子

学名の長き恐竜休暇果つ
炎の迫る川の記憶や敗戦忌
昨日より早き落暉や法師蟬
槌音に夕蝸の加はりぬ
秋の蝶飛びたきところまで飛べず
毬付きの一つを添へて栗届く
ありがとうと書けば尽く文秋澄めり

秋澄む

堺

昌子

夕照のあかねの雲や秋澄めり
釣竿にふれてははなれ赤とんぼ
秋澄めり機影は長き尾をひいて
梨の実の重さう園の上の空
どんぐりの実を手にのせて山の道
釣人の釣竿の先赤とんぼ
ばつた飛ぶのぎは重さう里の昼

深夜放送

小田嶋野笛

秋日傘上げて別れの合図とす
底深く夜の気を溜め花木榿
聞き流す深夜放送秋ともし
碁会所へ集ふ瘦軀や秋暑し
本流の風格となり秋の川
つくづくと白き豆腐や秋涼し
切腹の様など語り月見豆

秋

茜

加藤静江

行き合ひの空や流るる秋茜
微かなる虫の音静寂なほ深く
底紅や檜皮の門の水子仏
秋茄子の濃紺高値を諾へり
秋風や仙人掌の花の数
災害の続く列島秋暑し
風わたる青粉の沼や赤とんぼ

女郎花

高木邦雄

満目の青田波打つ夕べかな
隠沼の声の頻りや行々子
秋暑し眉根のくもる阿修羅像
無人駅一輪挿しのこぼれ萩
行き合ひの空の青さや女郎花
川風や釣船草の躍る岸
秋の水湛へて黙の山上湖

青炎集

森清 堯選



横浜 芝田幸恵

布靴の軽さにつられ灼かれけり
曼珠沙華掴み損ぬる虚空かな
水澄みて己と出合ふ句帳かな
おしろいや路傍育ちの子沢山
笛吹きの葉缶の破る夜涼かな
船着場の波を見てゐる秋思かな

横浜 橋場美篤

珊瑚樹の映ゆる洋館鳥の声
寺裏は色鳥の森風の森
水澄むや碑寂と池の中
町川に夕日の帯や秋澄めり
竹筒へ百円ぼとり唐辛子
三千夫師の墓に日矢差し秋の蝶

横浜 佐藤康子

留学の子への便りや夏の果
今朝のG線上のアリアかな
じやがいもの箱のこはれて届きけり
夕厨ジンジャーの香のほしいまま
かなかなや夕餉の仕度ままならず
鈍色の雲のもくもく野分くる

横浜 北郷和顔

散歩道筒先揃ふ百合の花
鷺草の飛翔の構へ鉢の湖
向日葵の同じ顔して天仰ぐ
蟬しぐれ持て成しとなる鄙の里
法師蟬説法超えの舌鋒よ
茅葺きの大屋根並ぶ郷の秋

横浜 布施由岐子

笑ふ山滴る山も見ずに秋
黒雲や急ぐ家路の白木槿
アルプスの水三ヶース震災忌
秋空に我を浮かべり潦
檸檬ひとつ残る静けさ店の棚
怖怖の茹ピーナツ胃にやさし

横浜 伊藤由良

外出自粛果つるともなき暑に耐へて
高だかと墓前に挿しぬ女郎花
道の辺の瑠璃を浮べてほたる草
まなかひをふつと横切る秋の蝶
縦横に狭庭占めたり萩の花
吾亦紅音符飛ばして野を広げ

藤沢 宮澤靖子

赤とんぼの群るる本栖湖富士映し
子規の忌や凹む机へ秋日影
繕はず今日を限りの秋簾
敬老日六瓢の軸の茶席かな
郵便船行く瀬戸内や去ぬ燕
公園の子らは帰りぬ秋の暮

大網白里 上家正勝

勝手口のサンダルにある残暑かな
また来るとふ後姿や酔芙蓉
夕霧の谷の鳥影奥熊野
携帯に訃報のありぬ曼珠沙華
さよならは午前零時や夜長の灯
紫蘇の実を摘む妻が指色の濃し

横浜 塚越弥栄子

禅僧の読経と競ひ蟬時雨
水は香を風は音増し秋立ちぬ
水澄みて影をもたざる魚走り
月揚げて影やはらかき小径かな
山裾の棚田に低く赤とんぼ
飛ぶ鳥が飛ばされゆくや野分空

新宿 浅岡麻實

油垂る換気扇拭き夏了はる
関寺小町のうしろ姿や秋蛭
桐一葉リセットボタン押せぬ間に
溢蚊の一匹を緒や人生論
庭師去りぬつと現る秋蛙
泥の芋出来上々と一筆箋

耕 土 集

岡野 里子



ゼッケンに期待縫ひ込み日の盛
みんなや堪ふるときめてスクワット
八景島に育つ昆布や湾の潮
ハチ公の間かぬ存ぜぬ秋うらら
なほ奥へ踏み入りがたし昼の虫

横浜 与田 幸江

鯉の飛ぶ水面にピルの灯りかな
ラジカセの四五人の輪や盆踊
秋されの夕餉や青きただちや豆
最終のシーバス着くや十日月
ウイルス禍をしばし忘るる月夜かな

横浜 平田 きみ

夜間工事地の底深く秋を掘る
秋の蚊のメ切せまる稿過る
熟れ柿の放りつばなしの余生かな
考妣や悔い残りたる敬老日
小さく買ふおはぎと供花や秋彼岸

横浜 岩崎 藍

白南風や空奪はれし日本橋
安曇野の水軟らかやかき水
二次会のオンザロックや江戸切子
老いてなほ店主の手際葛桜
盃蘭盆や箆筒の隅の腕時計

横浜 松川 昌義

デパートの四角の西瓜非売品
流灯やただひたすらに沖めざし
釣竿を仕舞ふ少年鯊一尾
笹舟の浮きつ沈みつ秋の川
物忘れ増えしこの頃秋茗荷

横浜 喜田 君江

さやさやと萩の花なり磴に散る
灯を消して闇に月光ほしいまま
蟋蟀の声のとぎれや小夜の雨
トラックの風道端の葛乱る
あとさきに畦の兄弟ねこじやらし

印西 大坂 正

うたた寝の背ゆり起こす秋驟雨
秋簾水のやうなる風抜けて
よき朝のよき顔出会ひ花芙蓉
活けられて月に濡れたる初尾花
葉月潮満ちて島影遠くなり

横濱 久保寺眞佐子

新涼や八十八の日々たのし
追善や御衣黄の袈裟涼新た
耐へてきし昭和一桁終戦日
蚊帳吊草過ぎし日のこと祖母のこと
ことのほか老骨に鏝出でて秋

横浜 杉山 善信

子と父と眺むる空や広島忌
鈴虫の白き髭振り朝を鳴く
地を拭ふやうに揺れをり乱れ萩
数珠玉の移りゆく色数多付け
下校児を見守る旗やいわし雲

横浜 宮之原隆雄

部屋に吊る貝風鈴や海遠く
ゆくりなく見上ぐる空の秋意かな
雁来紅夜来の雨に緋を極め
色鳥の高音賑はひ城の森
青信号待つ身へ残暑容赦なく

横浜 市川 夏子

百日紅戦火収まる時の無く
炎昼や石工ひたすら地藏彫り
麦の黄に染まる裾野や八ヶ岳
ボタン押し降りる秋日の無人駅
みちのくの武家屋敷道秋日満つ

横浜 和田 啓

鉄路添ひカンナの炎流れゆく
顔に触れ火照りを貰ふ唐辛子
白粉花紅白黄色並び咲く
秋の朝洗濯干しを染しめり
霧晴るる色の戻りて音戻る

町田 中野千代子

やはらかき鉛筆の芯カンナ描く
大樺蟬の木となる昼下がりに
曼珠沙華二両電車の線路傍
聞かぬ振りするも円満秋深し
休耕田コスモス満ちて風まかせ

横浜 小池 桃代

ひとすぢの寺の線香百日紅
昼寝せる風を枕の傘寿かな
白砂に残すほてりや秋の海
金木犀風楚々なりて大伽藍
山の端に沈む夕日や法師蟬

横浜 西 計郎